



# おじさんズ通信

2023年12月号 (No.37)

発行元：登別市新生町

桃柿通 緑風舎

発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

## あの頃、みんな**若**かった・・・回想「青い影」

今から52年前、「ぐるうぶ青い影」なる、詩の朗読と詩作を中心とする小集団が室蘭でうぶ声をあげました。

頭目は、独身だったワタクシ3号で、根城にしていた輪西町九条通りのアパートの一室を兼事務所に、ガリ版印刷に汗したり、硬くて青い詩論文芸論を風発したり、あのころ、みんな若かった、です。

集まりは6、7年で自然消滅しましたが、先日、室蘭・

港の文学館で地元の文芸史年表に、数行ながらグループが存在したことが記されていたことを思い出し、しばし半世紀前の青春を回想…。本通信50号の終着点が来る前に、忘れぬうちに一と、9号まで出した詩集を読み返し、掲載作品の中からいくつかを紹介することにしました。多少でも皆さまの詩心をくすぐられたら、幸いです。（作者名はイニシャルにしました）

山A・Sのふもとへ続く 真つすぐな道を  
私はひとりで 歩きます  
時は夕ぐれ  
オレンジ色の夕日が  
ぽっかりと 話しかけます  
私を包み

庭に咲いたマーガレットの乙女たちのこと  
キラキラ光る波間のざわめきごと  
野原の緑と土のにおいのこと  
そして 私の日焼けした頬のこと

ふいに、私は  
ステップを踏み 軽いメロディーを口ずさみ  
くるくるくるくる  
回りだした  
地球が回る  
目が回る  
くるくるくるくる  
夕映えの中にオレンジ色の化身は  
同化して 見えなくなりました

冬の日の涙が咲いた  
K・H

冬の日の涙が咲いた……  
木枯しのすぎまから  
太陽がそっと落とした  
ちいさな涙が  
大地に浸み込んで  
いま  
優しい春の風になぐさめられ  
冬の日の涙が咲いた

たんぽぽ たんぽぽ  
たんぽぽが咲いた  
ちいさな  
太陽のおとし児……

### 七月一日の夕ぐれ

A・S



### 街の詩 SONNET

K・K

やはらかな風が 私らのうへに春を被はせ  
私らの瞳を凝らせた この街のひととき  
春風はさすらい 飽くことを恐れる微笑を売る  
こっそりと ひくく 私らの港のうへ

私らは信じた 毎夜 繰広げられる夕焼空の夢  
何も汚れちゃいけない自然のなかに今朝が始まる  
すまなさそうに見上げた私らの顔に  
痛々しく染みる日光の眩しさがはじけている

私らは誰に尋ねやう 人の心の困惑を  
仕合はせのため私らの汗は流れるのではないか  
恥かしい冷汗が溜った海

淡々とふりそそぐ陽先しが涼しい匂ひを添える  
囁くやふな春は 街の隅々に草花を萌やす  
私らの笑ひ声 このくったくのない季節は追憶になるか

冬S・Tになつて  
なまけものキリギリスが  
冷たい冬の銀河へと飛びたった  
その抜け殻は  
もう歌おうとしなない

あいつは今頃きつと  
あたり一面星くずの真つただの中で  
ウロウロしながら  
それでも 少々使い古したヴァイオリンを  
片手に  
日の光をたよって  
陽気にやっっているに違いない

僕は相も変わらぬ  
赤茶けたツルハシを思いつき振りあげて  
ゴチゴチ霜のおりた地球を相手に  
春のくるのを待っている



午睡  
K・K

紫あざみ 朱色のひなげし  
その向こうをまっすぐに  
十字架ひとつの赤い屋根がみえてくる  
青い空には虹がかかり  
星たちが降りてくる  
緑の樹にはなしの実うまれ  
やさしい匂いが木の葉を揺らす

いつのころからか  
私の心に 夢がえのぐをおいて行く  
教会は思想ではなく  
とんがり屋根が好きだけ  
鳥が 花をくわえて飛んで行く  
悲しみはない  
しずかさと流れる風があるばかり  
私はその樹の下で眠りたい  
おもいでなんか わすれよう

### (生) Y・T

暗闇の中で  
白い手がのび  
何やら 探し始めた  
白い息が 微かに見える  
希望も懺悔もない  
-----  
今夜も又  
孤独の放浪が続く

あやかしの鐘 T・R

私は凡夫 自らに潜む平凡が  
一人前に 人で賑わう初もうでへ  
出かけようぜと誘いをかけてくる  
人波にもまれて 祈ろうと耳うちする  
十五万小都のおおかたびとが  
その夜の寺社に寄り集う頃  
誰も彼も 百八つの音が間を空けて  
夜空に溶けるのを聴いていた  
縁起は凶の年ほどさも流行り  
人間に存る迷いの数をうっちゃる鐘の  
鈍く響くので なお誘われる煩惱  
遠くにこらえる 葦の祈願の石畳に

## 権力の闇に対峙する記者達

本年1月公開の映画「SHE SAID/シー・セッド その名を暴け」を最近、観ました。ハリウッドで神とも呼ばれた大物プロデューサー、ハーベイ・ワインスタインの長年にわたる性的暴行事件を、ニューヨーク・タイムズ調査報道局の女性記者らが粘り強く追いかけて紙面化。世界中で社会現象となった性犯罪告発運動＝#MeToo運動を巻き起こすに至った実話を基にした作品です。

もう1作、紹介します。やはりアメリカ映画で2017年公開の「記者たち 衝撃と畏怖の真実」。同時多発テロ事件を契機に、米国がイラク侵攻の根拠とした大量破壊兵器は本当に存在するのか？ 地方新聞を傘下を持つ大手新聞社ワシントン支局の記者が、真実を暴こうと奔走する、これも実話作品です。



こうした政府などの陰謀や隠された犯罪を追及する記者たちの姿を描いた、先駆的作品といえるのが「大統領の陰謀」（1976年）で、先に挙げた「記者たち」の劇中交わされる「どうして記者なんかになっちゃったんだろう」「『大統領の陰謀』を見たからさ」との会話、不朽の名作ぶりを証明しています。

## 報道自由度 68位のトホホ

ひるがえって日本の映画で、時の権力の不正や悪だくみの実相に迫った実話の記者モノはどれだけあったか？ 知る限りゼロの気がします。そして戦後80年近く経て、むしろ日本のジャーナリズムは退化しているのではないか、と思えてきます。

例えば、「ワインスタイン事件の日本版」ともいえるジャニー喜多川の性加害事件。週刊文春裁判で事実が表面化しながら、その後も黙殺してきた日本のメディアの病巣は深く、国境なき記者団による世界の報道自由度ランキングで日本は130カ国中68位（2023年）との結果もムベなるかな、です。

最近の某週刊誌に、こんな談話が載っていました。

「最初は田中角栄から（官房）機密費を渡されましたが、私は『返す』と拒否しました。『一切、取材できなくなるぞ』とも言われました。でも、拒否し、それに応じてくれた」「貰ったら借りになります。借りがあると、言いたいことが言えなくなります。私はどの政治家にも何でも恐れずに発言してきた。しかし、多くの人たちは貰っていたらしい。取材できなくなるのを恐れたからでしょう」

ジャーナリストの田原総一郎氏の証言です。これじゃあ、メディアのホコ先が鈍るのも当然です。

## 今世禁句考 〇〇のくせに～

3年前、検察幹部の定年を政府判断で延長できるようにする検察庁法改正案に反対の嵐が巻き起こり、俳優の小泉今日子さんもSNSで「強硬採決に反対します」と意思表示しました。

すると「芸能人のくせに」「アイドルのくせに」と中傷する電話やメールなどが数多く来たといえます。

彼女は言う。「芸能人が政治的発言をして、みたいな批判をよくされるけど、政治的な発言かな？って思うんですよ。国民的な発言なのではないか、と」

アイドルだって、一国民。口封じは、ご法度です。

「男のくせに」「女のくせに」も禁句。そうそう、「年寄りのくせに」も、口にしてはいけません。

PR

8ミリから35ミリまで映像フィルムの  
DVD、Blu-ray Disc、その他各種  
メディア媒体への変換に応じています

「家に眠る映像フィルムを見たい」「ディスクに保存したい」そんな方々のために、あらゆる映像フィルム(8ミリ、9.5ミリ、16ミリ、35ミリまで)をDVD、ブルーレイ・ディスク、その他各種メディア媒体への変換に対応可能です。所要日数、料金など、お問い合わせください。

札幌映像機材博物館 Tel 090-8631-7050

## 薫風 烈風

▶「驕る平家は久しからず」は、もはや死語かと思っていたら、生きていました。自民党政治資金パーティーの裏金問題。検察の捜査で安倍派や他の4派閥に激震が走っています。

「数は力、力はカネ」（田中角栄）の伝統的論法で、いつしか、最大派閥という慢心から「政治資金報告書に不記載でも、お咎めはないだろう」と錯覚したのか。長年の黒いツケは「訂正しました」で済む話ではない。この人たち、何のために政治家になったのだろう。

▶室蘭・港の文学館2階で月に1回程度、ドネーションのホット・コーヒーを味わいながら1時間ほど、親しき人とテーマなしの談笑にふけることが、今年の春あたりから続いています。

そうしたこともあって今月号では、詩の朗読会や詩画展を開いたり、ねじり鉢巻きで謄写版印刷に奮闘して冊子作りした仲間の顔を思い出しながら、当時出した詩集作品をほんの少しですが紹介しました。

わら半紙を袋綴じにした手作り詩集は、文字がかすれたり、ホッチキスのサビが浮き出たりで、半世紀の移ろいを確実に物語っています。複製版でも作りましょうか…と思案しているうちに、今年も残り半月に。皆さん、笑顔で新年をお迎え下さい。お元気で～。